

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	観光学研究科	観光学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	観光学研究科・観光学専攻・5年	鄭玉姫	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	観光学部・教授	松村公明	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	韓国南海沿岸部における民泊地域の形成とその意義		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2010 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

従来、韓国農漁村における民泊は、海水浴場周辺にある家屋で夏季の海水浴客に空き間を貸したことから誕生した。これは、増加する海水浴客に対し集落内に宿泊施設が未整備であったことに起因している。民泊を営むことは、農漁村における新しい農外所得源として位置づけられ、地域活性化の対策としても浮上している。

本研究では、農漁村における民泊地域を取り上げ、訪れる観光客の宿泊実態を把握するため、アンケート調査を実施した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[民泊客] [宿泊実態] [韓国・南海島]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 背景と目的**

韓国では農山漁村において住民が家屋の部屋を観光客に貸すことを、民泊という。韓国における民泊の始まりは、1970年代前半の海水浴場や山岳などの自然資源を擁する地域ですとされる。これらの地域では、ホテルや旅館などの宿泊施設の整備が観光客の増加に、追いつかない状況にあったため、民泊が急増することとなった。さらに、当時は道路や交通の便が未発達で、日帰り旅行よりも宿泊旅行が好まれていたことも民泊の増加を促した。とくに、海水浴場周辺に民泊地域が広く形成されている。これは、経費がかからず誰でも楽しめる海水浴が、国民的な余暇として発展した背景によると考えられる。

民泊は、トイレとシャワー室が一般的に共同使用であるが、近年、トイレ・シャワー室、台所を部屋に取り付けたかたちの民泊家屋が増えている。これには、民泊客の客層や宿泊に対する条件などが影響すると考えられる。そこで、本研究は、農漁村における民泊地域を取り上げ、民泊客を対象に宿泊実態を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象地と研究方法

(1)研究対象地としては、韓国南沿岸部に立地する慶尚南道南海島尚州海水浴場周辺地域の尚州集落を取り上げた。尚州海水浴場は韓国南部の最大の海水浴場で、2008年には約81万人の海水浴客が訪れている。そして尚州集落は全164世帯(2008年現在)の70%以上が民泊を経営する民泊地域として知られている。

(2)研究方法は、アンケート調査であって、民泊家屋に宿泊する民泊客を対象に、民泊客1組ごとに調査票一枚を配布し記入式で行なわれた。アンケートの設問は、基本情報、旅行日程、民泊滞在の3項目に分けられる。

(3)調査期間は、2010年7月30日から8月7日までで、153組(765人)から回答をえた。

3. アンケート調査の結果**(1) 民泊客の属性**

まず、アンケート回答者の性別をみると、男性が71.2%(109人)、女性が28.8%(44人)で男性ははるかに多い。年齢層をみると、20代が54.2%で最も多く、次に30代27.5%、40代以上14.4%、10代3.9%の順になっている。とくに、20代と30代を合わせると81.7%を占め、民泊客の主な客層を成していることがわかる。この結果は、アンケートに回答した代表者に限ったことになるが、回答者の性別と年齢は全体のことをほぼ表している。

さらに、アンケート回答者の職業をみると、会社員が43.8%で最も多く、次に学生22.9%、自営業者13.1%の順になっている。

最後に、民泊客の居住地を道別に区分すると、慶尚南道が60.1%(92組)で最も多く、次に全羅南道20.3%(31組)、京畿道13.7%(21組)、慶尚北道4.6%(7組)、忠清南道1.3%(2組)の順になっている。これを市・郡別にすると、釜山市22.9%(35組)、晋州市11.1%(17組)、昌原市11.1%(17組)、光州市7.8%(12組)、ソウル市5.9%(9組)の順になる。

このように、民泊客は20代~30代の会社員や学生によって構成されており、民泊客の居住地をみると尚州海水浴場から自家用車で3時間以内の慶尚南道から、5時間以上かかる首都圏のソウル市もみられる。

(2) 旅行日程

まず、民泊客数をみると、4人以下が55.6%で最も多く、5~6人は28.1%、7人以上は16.3%を占めている。4人以下のうち、2人は8.5%で、キャプルの民泊利用は少ない。

さらに、民泊での滞在日数をみると、1泊2日が75.8%(116組)で最も多く、次に2泊3日は22.2%(34組)、3泊4日以上が2.0%(3組)の順になっている。これには、民泊料金の高低によるものである側面がある。つまり、民泊施設が最新な新築の民泊には1泊2日が多く、旧家屋には2泊3日以上が多くなっている。

最後に、民泊客が利用する交通手段をみると、自家用車が85.1%で最も多く、次に高速バス12.3%、貸切バス1.3%、レンタカー1.3%の順になっている。

研究成果の概要 つづき

(3) 民泊の訪問と予約

まず、訪問回数をみると、初めてが 73.9% (113 組) で最も多く、リピーターは 26.1% (40 組) になる。また、リピーターに限って訪問回数をみると、2 回が 21 人 (52.5%)、3 回 12 人 (30.0%) で、主に 2 回目のリピーターが半数を占めている。

次に、予約の状況をみると、予約 (69 組) より直接訪問 (84 組) が多くなっている。これを訪問回数からみると、初めての民泊客では直接訪問が 54.0% (61 組) で予約の 46.0% (52 組) より多い。また、リピーターでも、直接訪問 (57.5%) が予約 (42.5%) より多い。そこで、予約の媒体として多くの民泊客がインターネットを利用していた。民泊経営者は尚州海水浴場管理事務所ホームページに民泊家屋の情報を掲載しており、中には個人ホームページを開設している民泊経営者もいる。

(4) 民泊家屋の選択条件

民泊客は宿泊する民泊家屋を決めるとき、民泊料金 (32.6%) を最も優先している。そのほかに、エアコンの使用 (20.3%) や民泊家屋と海水浴場との距離 (18.8%)、トイレ・シャワー室の使用 (13.8) があげられる。その一方で、民泊家屋を決める優先条件に民泊家屋での施設や設備を回答した民泊客は、若干民泊料金が高くなっても泊まると話している。これは、とくに初めてや同行者が 5 人以上の民泊客に顕著である。その理由に、前者は、宿泊施設の便利さを求める傾向が強く、後者は同行者数によって自分負担が軽減するためであると考えられる。

4. まとめ

民泊地域を訪れる民泊客の宿泊形態に関する今回の調査から、以下のことが明らかになった。

1. 民泊客は、友人同士の 20 代～30 代によって構成されるが、家族連れの観光客も増えている。民泊客の職業は会社員が最も多く、次に学生が多い。民泊客の居住地は、尚州地域から自家用車で 3 時間以内の地域からが多くなっている。

2. 民泊客は 5 人以上が 4 割を超えており、主に自家用車を利用する人 (85.1%) が多い。また、宿泊は 1 泊 2 日が多くて以前より短くなっている。

3. 民泊家屋を決める優先条件には民泊料金が挙げられる。中には、民泊家屋での施設使用を優先して、民泊料金はこだわらない意見も存在する。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他

立教大学大学院観光学研究科 博士論文中間報告会

鄭玉姫:韓国慶尚南道南海島における民泊経営の展開と地域変化, 2011年1月29日, 立教大学新座キャンパス, N211教室.